フィールド(現場)からの風 ⑭

宮田守男

人が交流する機会の大切さを考えてみませんか

2009年11月12日「人間力を磨こう」からコラムを書き始めて、今年110回を超えた。常に「今のままでいいんですか」と自らに問いながら物事を見つめ書き続けているコラム。隔週の掲載、4年に及ぶ時間の経過、多くの人に読んでほしいとの願いもあり、「フィールドからの風」として「本」を出版することにした。

地域から文化を発信したいと考え、発行所と印刷も大北地域内の名となるよう企画したが安易な考えだったと思い知らされる。最近では、ほとんどの書籍にバーコードが印刷されている。このISBNコードを取得する作業が国際基準による作業だと初めて知る。

1970年、ISO(国際標準化機構)規格として承認され、世界各国・各地域への普及が始まり、日本でも従来の「書籍コード」から、ISBNへの移行が決定、1981年1月から実施されている。数字は、それぞれ意味を持ち、978・4は、日本を意味し、続いて本の内容により該当する記号や発行所の番号を取得することができる。この手続きに1か月近く費やしてしまう。

知人らの協力で、4月中旬、出版を記念して会を開くことができた。人は生かされているときに多くの人との出会いがある。しかし私を知る人でも、私の知人を知る機会は限られている。唯一、顔を合わせるのは人生最後の葬儀場。生きているうちに、人のネットワークを広げたいとの思いもあった記念会だ。

会場は、初めて会う人が多いので、交流しやすいよう立食形式とし、腰掛けを周りに配置する会場スタイル。楽しんでもらえるのかと心配したが、乾杯してすぐ司会者のマイクからの声をかき消すほどの、会話が会場を埋め尽くす。同じ村内関係者も、お互い会話する機会は限られ、特に勤務した職場を退職してからは、交流するネットワークが小さくなる現状がわかる。

「お久しぶり」、「懐かしいね」の会話の温かさが会場に広がる。群馬県から参加した青木公舅さん、文部科学省の研究会で委員となった折、知り合った方だ。当時全国PTA連合会副会長、当然知り合いはいないと思っていたが、参加者の松沢貞一さんとにこやかに会談。お互いPTA会長としての知人だと知る。人とのつながりの深さを知る。

会場を去る多くの参加者から「多くの人と出会えて良かった」、「出版記念会、堅苦しいと思っていたが、参加して良かった」と声がけしてもらう。「掲載したコラムは読んでいるが、本として読む内容は、違う感情を呼び起こす」、「私も同じ」との感想の声、読みたいときに、読むからだろうか。不思議な魅力が書籍にあるのだろう。

総務省統計局の日本統計年鑑によると、平成24年に8万2200点の新刊書籍が出版されている。大北地域でも、これまで多くの書籍が出版されてきた。だがなかなか知人が集まって記念会が開催されないことも事実だ。書籍出版の機会だけではない、人生の中でお祝いする出来事は、誰もが必ず持っているはずだ。何人が集まるかは問題ではない。会の内容も問題ではない。集まって話すことに意義あるのだ。地域の中で、限られた人たちだけで交流するのでなく、普段付き合いの無い人たちとの交流が地域にとって必要だと思ってほしい。そのことが「地域力」として根付くはずだ。

東日本大震災以来、若い人たちが「地域のために役立ちたい」と言っているのをよく聞く機会がある。何かが確実に良い方向に変わってきている。一人一人にできることは限られている。しかし誰もができることがあると信じたい。そんな思いを強くした出版記念会の場でもあった。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

多くの人と交流したいとの思いが会場を楽しい現場としている